文化

あらゆる学問を横断・融合　同志社大が提唱

現代社会のさまざまな課題を良心という観点から考察しようと、同志社大が新たな学問「良心学」を提唱している。同志社にとって、良心は新島襄（にいじまじょう）（1843～90年）の建学精神に通じる概念だが、自校の歴史研究にとどまらず、時代を超えて学外にも通用する学問にすることが目標。文系・理系を問わず、さまざまな学問を横断し融合する試みにもなっている。

（小野木康雄、写真も）

「良心学」新たな視点

64人が履修

「良心とは何かを、あなたならどう説明しますか」。4月に行われた春学期1回目の良心学の講義で、良心学研究センター長の小原克博・神学部教授（宗教倫理学）が学生らに問いかけた。

講義は意見を引き出しながら進む。学生からは「人間らしい良い心」「道徳」などの答えが聞かれたが、小原教授はそれらを踏まえつつ、こう述べた。

「道徳では、良いことを選び取って実践することが求められる。でも善悪は簡単には判断できないし、立場が違えば逆転する。価値観の対立や葛藤をどう受け止めるかも考えてみたい」

良心学は、学年や学部を問わない教養科目として平成26年度に創設された。5年目を迎えた今年度は1～4年生の64人が履修登録しており、社会学部や経済学部を含む教員4人がリレー形式で担当する。

理系もターゲット

学問としての良心学は「人間のあらゆる活動に良心が関わる以上、すべての学問が射程に入る」とされており、複数の領域にまたがり結びつける学問と位置づけられている。

哲学などの人文科学だけではなく、たとえば「良心的なお店とは何か」といった経済学の視点など、社会科学ともつながっている。

自然科学も対象だ。脳科学では、良心に影響する脳機能を調べることができる。自らを犠牲にする昆虫や哺乳類の「利他的行動」を良心の一種と考えれば、進化生物学とも関連する。

小原教授は、科学者自身にとっての良心を問い直す。先の大戦で原爆開発を進めた米国のマンハッタン計画から近年日本で相次ぐ論文不正まで、科学者にとって良心は積年の課題であり続けた。「良かれと思った研究が誤った方向に進むこともある。暴走する危うさが、良心にはある」と指摘する。

入門書を出版

良心学研究センターは講義開始の翌年に当たる27年に設置されたが、講義の回を重ねるごとに活動の幅を広げてきた。研究員を兼任する教員は40人を超え、教材用に作ったブックガイド『良心を考えるために』は今年3月、増補改訂版の発行にこぎつけた。

ブックガイドは参考文献の紹介という体裁をとりつつ、教員らが自分の専門領域と良心がどう関係するか、良心という視点で専門領域を見たときに学問としてどんな広がりが展望できるかを、分かりやすく解説している。

一般向けには、7月に『良心学入門』（岩波書店）を刊行する予定。7月までに3回、公開シンポジウムの開催も予定している。小原教授は「いまは基礎研究の段階なので、方法論を固めたい」とした上で「良心は人類にとって普遍的な問題。国際社会にアピールできる学問になれば」と意欲を語っている。

学生にマイクを渡して発言を聞く小原克博教授。良心学の講義は、意見を引き出しながら進んでいく　＝同志社大

新島襄と良心教育　新島が明治22年に学生へ送った書簡には「良心之全身ニ充満シタル丈夫（ますらお）ノ起リ来ラン事ヲ」と書いた一節がある。同志社は新島の没後50年に当たる昭和15年、今出川校地（京都市上京区）にこの言葉を刻んだ良心碑＝写真＝を建立。新島が目指した良心教育の象徴として、時代を超えて受け継いできた。

産経新聞
2018年6月
12日、朝刊
大阪本社版